のありようである。更に『河口慧海著述拾遺』では，河口慧海に関する関連文献が網羅され，端的な解説を付されてリスト化された。本書は，上述の研究成果のうち，特に『河口慧海著述拾遺』の内容を引き継ぎ，更に充実と彫琢が加えられたものである。

河口慧海については，奥山直司氏の研究をはじめとして，優れた考察がいくつもなされている。しかしひとり高山氏のみが積み重ねられてきたものが，河口慧海関連資料の博捜とその検索結果の公開であり，本書に象徴されるように，その参照性の高さが，高山氏の研究の第一の特徴であると言えるだろう。本書の持つ意義は，例えば河口慧海に関連する資料そのものをアーカイブとして残すこととは異なる。資料現物を収集し，保存し，公開することは，デジタルデータ化が進んだ現在であっても，財政的・物理的な様々の条件に制限される。資料の総てをアップロードすることが可能である場合は，多くはないと思われる。しかし本書は，関連資料リストであると同時に，資料が存在することの，明確かつ端的な記録でもある。現物の所在が不明なもの，現物へのアクセスが困難なものである場合，その記録が残されることは，後世の研究者にとって非常な意味を有する。そして資料がいわば些末なもの，断片的なものであればあるほど，このような意味は濃く持たれるものとなる。

本書執筆のために同氏が収集された膨大な資料は，河口慧海の生地である堺市の市立博物館に寄贈されるという。検索という行為は個人的なものであるが，その結果が公開性の高い形で残されることで，高山氏個人を超え，更には「河口慧海」をも超えて，他の研究者，研究分野とリンクする可能性が確実なものになったと言えるだろう。

（高本康子）

淺村卓生著

『国家建設と文字の選択：ウズベキスタンの言語政策』

風響社，2015 年 10 月刊

A5 版，64 頁，800 円＋税

本書は，ウズベク語における文字選択がウズベキスタンの国家史と相互に関わりあっているということを，独立後のみならずソ連期の動向をも含めて分析・考察を述べている研究である。以下，「はじめに」「おわりに」を除く 3 つの章を簡単にまとめる。

第 1 章「ウズベク語をめぐる現状」では，題が示すように，キリル文字とラテン文字の両方が見られるウズベク語表記の現状について紹介している（ウズベク語は 2010 年 9 月までにラテン文字化が完了する予定だった）。

第 2 章「ソ連邦期の言語政策と文字改革」は，「そもそもなぜキリル文字の代替としてラテン文字が選択されたのだろうか。」という疑問から始まる。本書は，この疑問の答えを，ソ連邦期に何度も文字変更を経験したウズベク語表記の歴史に求める。

まず，本書は1920年代に試みられていたアラビア文字の改良について述べる。1921年の正書法会議では，外来語を新しい子音と母音で表記するという決議によって，それらの伝統的な正書法及びそれに伴う文字の使用を明確に拒否した。そして，この決議を基に，数回の正書法会議が行われ，1923年にアラビア文字による新正書法が制度化された。その後，1926年第1回全連邦テュルク学会議でラテン文字化が模索された。さらに，1927年から31年にかけて五回にわたって全連邦新テュルク・アルファベット中央委員会の総会が開催された。その総会の主要な問題の一つとして，ラテン文字によるテュルク共通アルファベットの実現があった。その中で，ウズベキスタンは，1929年5月のウズベク語正書法会議で，テュルク共通アルファベットの方針に従ったラテン文字を採用している。しかし，ラテン文字採用から10年も経たない1938年頃には，キリル文字への変更が検討され始めていた。これは，ロシア語の地位向上が大きく関係していた。そして数々の議論を経て，1940年5月8日にキリル文字への切り替えが正式に発表された。このキリル文字正書法は，ロシア語のキリル文字のありようを最大限踏襲するものであった。そのため，キリル文字が普及するにつれて，専門家の間でキリル文字正書法に問題があるとする意見が噴出した。

第3章「ウズベク語表記の行方」では，主に独立後のラテン文字化について述べている。1991年のソ連崩壊を経て，各共和国で自国語の文字に対する変更が検討された。実際にラテン文字化した共和国（アゼルバイジャン，トゥルクメニスタン，ウズベキスタン）の憲法にはロシア語への言及がない。つまり，この文字変更は，規範としての諸々の「ロシア」の影響力に対する明示的な異議申し立ての意味を帯びている。そして，様々な議論の結果として，1993年に，ウズベク語へのラテン文字再導入が決定された。しかし，1995年に改定された。この原因として，仮説ではあるが，①特殊文字の不便さと②欧米への接近の二点を挙げている。さらに，2000年代にロシアとの関係修復が見られたことは，ラテン文字化が中途半端な形で停滞している現状と平仄が合うとする。つまり，ウズベク語における文字改革は，内政問題やロシアとの外交関係とリンクされて処理されていると結論付ける。最後に，ラテン文字化政策の今後について，政権側の言語政策上の新たなイニシアチヴが発揮されない限り，ラテン文字とキリル文字の共存状態が継続するだろうとしている。

私は，ウズベク語を言語学的に分析する場合，必ずしもソ連期および現在のウズベキスタンの政治状況を知る必要はないと考える。しかし，現在でもソ連期に編纂された文法書がウズベキスタン国内の数多くの研究で参照されていることを鑑みると，当時の言語政策でどのような決定がなされたのかを知ることは，決して無意味ではないだろう。

（日高晋介）